

# 第28回 高校生による海外エネルギー事情研修会 実施報告書



新発見 ～未来きりひらくエネルギー～

令和8年（2026年）3月  
主催 青森県商工会議所連合会

後援 青森県、青森県教育委員会、  
(株)東奥日報社、(株)デーリー東北新聞社、(株)陸奥新報社、  
青森放送(株)、(株)青森テレビ、青森朝日放送(株)

# 目次

---

➤ まえがき	2
➤ 研修参加者	3
➤ 研修全体スケジュール	5
➤ 事前研修会	6
➤ 海外研修会	8
➤ 知事への報告	16
➤ 座談会	18
➤ 研修レポート	20

# まえがき

青森県商工会議所連合会では、次世代を担う高校生に国際的な視野を養い、エネルギー事情への理解を深めてもらうことを目的として、「高校生による海外エネルギー事情研修会」を開催しております。第28回となる今回は、青森県内の高校2年生6名（男子2名、女子4名）が参加し、令和8年1月26日から12日間の日程でフランスおよびスウェーデンを訪問いたしました。

本研修に先立ち、2度の事前研修会を開催し、世界および日本のエネルギー情勢、再生可能エネルギーの課題、原子力発電所の基礎知識、さらに東日本大震災が日本の原子力発電所に与えた影響などについて学びました。また、東通原子力発電所や六ヶ所村の原子燃料サイクル施設を見学し、本県の原子力発電所の稼働に向けた計画や安全対策について理解を深めました。

意見発表の準備では、海外の高校生に向けて日本のエネルギー政策の現状や、自身が考える望ましいエネルギー供給の在り方を伝えるため、資料構成やプレゼンテーション内容のブラッシュアップを重ねました。その過程で、日本のエネルギー政策が地理的要因や気候条件、さらには歴史的背景や心理的要因の影響を受けていることへの理解が深まり、生徒一人ひとりが将来のエネルギー供給の理想像を明確に描いていく姿が印象的でした。

訪問先のフランスおよびスウェーデンでは、原子力関連施設の見学を通して、安全対策や放射性廃棄物の再処理・地層処分の取り組み、さらには原子力施設の稼働に対する国民との信頼関係構築の在り方など、日本との相違点を学びました。また、現地高校への訪問で生徒たちは、エネルギーの安定供給に向けた意見発表や現地高校生との活発な議論を行い、将来のエネルギー政策を選択していく主体が自分たち自身であること、そしてその選択肢が多様に存在していることを強く認識しました。

本研修会を通じて、生徒たちは「自国を理解すること」「自らの意見を持ち、積極的に発信すること」「多様な価値観を尊重すること」の大切さを体験的に学ぶとともに、現地の高校生との友情を育むことができました。

この研修会を新たな出発点として、生徒たちが本研修で得た学びと経験を糧に、広い視野と主体性をもってそれぞれの進路を切り拓いていくことを期待しております。

最後に、本研修会を無事に終えることができましたのは、フランスおよびスウェーデン両国の関係者の皆さまをはじめ、ご支援・ご協力を賜りましたすべての皆さまのご尽力の賜物であり、心より深く感謝申し上げます。

第28回高校生による海外エネルギー事情研修会団長  
青森商工会議所 中小企業振興部 経営支援課 主幹  
村田 麻奈美

---

## 研修参加者

# 参加高校生と引率者

## 【高校2年生 6名】

青森県立八戸高等学校	おおの 大野	はるか 陽香
青森県立五所川原工科高等学校	こがわ 古川	らいど 雷音
八戸聖ウルスラ学院高等学校	さんのへ 三戸	ひとみ 瞳
青森県立田名部高等学校	つぼ 坪	さえら 紗衣来
青森県立弘前中央高等学校	はなだ 花田	なゆか なゆか
青森県立青森工業高等高校	ほり 堀	しょういちろう 翔一朗

(五十音順)

## 【引率者】

青森県立青森工業高等学校 教諭	小山内 好子 氏
青森商工会議所 経営支援課 主幹	村田 麻奈美

# 研修全体スケジュール

---

## 第1回事前研修会（むつ市ほか）

令和7年10月14日(火)～15日(水)

- エネルギー学習
- 東北電力(株)東通原子力発電所、  
日本原燃(株)原子燃料サイクル施設を見学

## 第2回事前研修会（青森市）

令和8年1月6日(火)～8日(木)

- 自己紹介（英語）の原稿作成&リハーサル
- プレゼンテーション資料作成&リハーサル  
（日本・青森の紹介、日本のエネルギー事情）

## 海外研修会

令和8年1月26日(月)～2月6日(金)（12日間）  
（詳細は9ページより）

## 知事への報告

令和8年2月24日(火)

- 知事へ研修成果や感想の報告

## 座談会

令和8年2月24日(火)

- 今回の研修全体の感想や成果、将来のエネルギーの  
在り方などについて参加した高校生同士で座談

---

# 事前研修会

# 事前研修会の様子

## 第1回事前研修会(10/14~15)

●エネルギー学習、東北電力(株)東通原子力発電所・日本原燃(株)原子燃料サイクル施設の見学



## 第2回事前研修会(1/6~8)

●海外の高校を訪問して行うプレゼンテーションのリハーサル、放射線についての学習



---

## 海外研修会

# 海外研修会行程

	月日	行 程	実 施 内 容
1	1/26 (月)	青森県内各地 ⇒ 東京都内 ⇒ 東京 (泊)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●新幹線で移動後、都内ではバス移動</li> <li>●スウェーデン、フランス大使館を表敬訪問</li> </ul>
2	1/27 (火)	羽田空港 ⇒ パリ ⇒ カーン (泊) [フランス]	<ul style="list-style-type: none"> <li>●空路、約15時間でフランスへ</li> <li>●パリから約3時間のバス移動</li> </ul>
3	1/28 (水)	カーン⇒モン・サン・ミッシェル ⇒シェルブール (泊) [フランス]	<ul style="list-style-type: none"> <li>●世界遺産「モン・サン・ミッシェル」見学</li> </ul>
4	1/29 (木)	シェルブール⇒ラ・アーグ ⇒シェルブール (泊) [フランス]	<ul style="list-style-type: none"> <li>●オラノ社「ラ・アーグ再処理施設」見学</li> </ul>
5	1/30 (金)	シェルブール (泊) [フランス]	<ul style="list-style-type: none"> <li>●グリニャール高校の生徒と交流</li> </ul>
6	1/31 (土)	シェルブール ⇒パリ (泊) [フランス]	<ul style="list-style-type: none"> <li>●パリへ約5時間のバス移動</li> <li>●ベルサイユ宮殿、パリ市内見学</li> <li>●前半の成果と反省を振り返り</li> </ul>
7	2/1 (日)	パリ⇒ストックホルム (泊) [スウェーデン]	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ルーブル美術館見学</li> <li>●空路、フランスからスウェーデンへ</li> </ul>
8	2/2 (月)	ストックホルム ⇒ウプサラ (泊) [スウェーデン]	<ul style="list-style-type: none"> <li>●環境モデル地区ロイヤル・シーポート見学</li> <li>●市庁舎などストックホルム市内見学</li> </ul>
9	2/3 (火)	ウプサラ⇒エストハンマル ⇒ウプサラ (泊) [スウェーデン]	<ul style="list-style-type: none"> <li>●フォルシュマルク原子力発電所 (PR施設) と フォルシュマルク中・低レベル放射性廃棄物 貯蔵施設見学</li> </ul>
10	2/4 (水)	ウプサラ (泊) [スウェーデン]	<ul style="list-style-type: none"> <li>●ヴァッテンフォール高校の生徒と交流</li> </ul>
11	2/5 (木)	ウプサラ⇒ストックホルム ⇒ (機内泊)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●空路、ストックホルムから帰国の途へ</li> </ul>
12	2/6 (金)	⇒ 羽田空港 ⇒ 青森県内各地	<ul style="list-style-type: none"> <li>●羽田空港到着後、新幹線にて青森へ移動</li> </ul>

フ  
ラ  
ン  
ス

ス  
ウ  
エ  
ー  
デ  
ン

# 海外研修会の様子

海外渡航前日に大使館を表敬訪問・現地事情受講(1/26)

●スウェーデン大使館(SKB 竜啓介氏)



●フランス大使館(ジル-ベルナルド=ミッシェル原子力参事官)



## 渡航(1/27)

- 羽田空港の出発ロビー、シャルルドゴール空港(パリ)へ



## <フランス>

### オラノ社 ラ・アーク再処理施設を見学(1/29)

- 施設について説明を受けた後に各施設を見学



## <フランス>

### グリニヤール高校との交流会(1/30)

#### ●英語で自己紹介、日本・青森に関するプレゼンテーション



#### ●エネルギーに関するプレゼンテーション&ディスカッション



#### ●文化交流と夕食会



## <スウェーデン>

### ロイヤルシーポート、ストックホルム市庁舎、ストックホルム・コンサートホール見学(2/2)

#### ●ストックホルム市による環境モデル地区ロイヤルシーポートの説明



#### ●ストックホルム市庁舎



#### ●ストックホルム・コンサートホール



## <スウェーデン>

### フォルシュマルク中低レベル廃棄物、フォルシュマルク原子力発電所PR施設(2/3)

#### ●フォルシュマルク中低レベル廃棄物貯蔵所概要説明・説明者との昼食



#### ●フォルシュマルク原子力発電所PR施設見学



## <スウェーデン>

### ヴァッテンフォール高校との交流会(2/4)

#### ●英語で自己紹介、日本・青森に関するプレゼンテーション



#### ●エネルギーに関するプレゼンテーション&ディスカッション



#### ●文化交流と夕食会



---

## 知事への報告

## 知事への報告の様子

今回の海外研修会で訪問したフランスとスウェーデンのエネルギー関連施設や  
現地高校生との交流で学んだことや感想を青森県知事へ報告(2/24)



---

# 座談会

# 座談会の様子

海外研修会を終えて、日本のエネルギーの在り方や現地高校生との交流について、感想などを含めて高校生同士で懇談した(2/24)



---

# 研修レポート



まず、12日間の海外研修で学んだ、フランス・スウェーデンのエネルギー事情、施設等の見学、海外の高校生について、日本と比較しながら紹介します。

#### 【エネルギー事情】

フランスは、エネルギーの8割を火力発電に頼る日本と対照的に、原子力7割、再生可能エネルギー2割強、火力は1割未満、火力は緊急時やピーク対応がメインとなっています。一見環境に良い理想的なエネルギーミックスのように思えますが、原子力は使用後の燃料や設備の放射線を10万年かけて減らさなければならないので、環境を破壊して処分場をつくることにつながり、使いすぎることはできません。そこでフランスは、2030年までに原子力の代わりに再生可能エネルギーの割合を40%に増やそうとしています。今から原子力を増やそうとする日本の一歩先を進んでいると感じました。また、エネルギー消費自体を減らす政策も行っていて、建物の壁を厚くすることや冬の部屋の温度を19℃（寝室は17℃）以下にすることなどが推奨され、電力消費を抑えようとしています。

スウェーデンは、自然を意識してエネルギー開発をしています。大きな湖による水力発電や豊富な森林によるバイオマス発電が盛んです。かつて日本と同じように石油に頼っていましたが、石油危機で火力のかわりに原子力を用いることになったそうです。2040年には火力を0%にしようとしています。その後、エネルギーの多様化を目指して風力も増やされています。エネルギー消費の面では、フランスと同様、暖房に関する工夫がありました。ドアや窓周りの断熱・暖房をしっかりとして効率的に部屋を暖め、大気などから熱を取り込むヒートポンプという施設を使う家庭も多いです。

#### 【施設の見学】

オラノ社のラ・アーク再処理工場を見学しました。セキュリティがとても厳重でしたが、使用済み核燃料を冷却プールに入れる方法などで六ヶ所の施設と違いがありますが、何よりも日本と異なるのは、すでに60年も稼働し寿命を迎えたプラントがあることです。日本は特に経験の面でフランスに学ぶことが多いと思います。

環境モデル地区のロイヤルシーポートはとてもきれいな街で、見学先の中でも特に印象に残っています。何曜日の日時でも分別してごみ出しのできるごみ箱がありました。ごみ箱がいっぱいになったら、それをセンサーが感知し処理場まで地下を通過して吸引する仕組みになっています。ガラスや危険ごみのごみ箱はマンションの地下にあるそうです。一部のごみは機械がごみ袋の色を認識することで分別しています。便利な上に路上のごみの散乱も防げる、一石二鳥な施設だと思いました。また、自転車か徒歩で移動する人が多く、車はあまり走っていませんでした。自転車道がしっかりと雪かきされ、ほかにもスパイク付きのタイヤを用いるなどの工夫により、冬でも比較的安全に自転車を使うことができるようでした。洪水時道路脇の植物が水を吸ってくれる緑のダムや太陽の光を遮り冷房のための電力を抑える緑のカーテンをつくっていました。植物のリストをつくって、吸水・遮光・鑑賞など

の目的に応じて植物を選ぶという、綿密な計画のもと植物を植えているようです。実用と娯楽を兼ねた、素敵なアイデアだと思いました。今はいろいろなデザインのベランダを試して、一番断熱性の高いものを探しているようです。「learning by doing」のもと、実験後の調査や評価に力を入れています。この試行錯誤の精神やユニークな発想は日本にまだ足りないものだと思うので、日本に広めていきたいです。そして、これらのプロジェクトは政治家や住民の協力が欠かせません。子供向けの街の見学はもちろんのこと、年に一回住民が集まりより良い環境やまちづくりについて話をする場を設けているそうです。意識しなくても比較的街のきれいさが保たれるからか、日本人は環境に良いまちづくりに関心がないように思います。まちづくりについて考える機会を設けるべきだと思います。

スウェーデンは使用済み核燃料の最終処分がフィンランドに次いで世界で2番目に進んでいる国です。スウェーデンは、使用済み核燃料のリサイクルはコストがかかる割に2回目以降の発電量が少ないとして、一度燃料を使った後再利用せず埋める方針であり、すでに使用済み燃料の最終処分場をつくり始めています。スウェーデンの固い地盤に加え、ベントナイトという水を吸うと気密性が非常に高くなる物質でコンテナを入れる穴に蓋をすることで安全に処分します。日本は地盤が弱く地震も多い上に、山地が多く掘削が大変なので、地層処分をするのであればスウェーデン以上に頑丈で気密な施設を作り、場所選びや規模を工夫しなければいけないと思います。

#### 【海外の高校生】

日本のエネルギー教育の遅れを感じました。フランスは小学校からエネルギーの授業があり、遠足でラ・アーク再処理工場に行くそうです。グリニャール高校では、入学してすぐにエネルギーに関する情報をパネルにまとめるそうです。エネルギーについての情報を与えられすぎて、逆にもうエネルギーについて考えたくないと思う人がいるくらいらしいです。日本はほとんど教科書の上でしかエネルギーについて学ぶ機会がなく、私自身これまではエネルギーに関する単語を聞いたことがある程度だったので、エネルギー教育の遅れは大きな課題だと思います。特に、青森には原子力の施設がいくつもあるので、学校行事として行かないのはもったいないと思いました。また、国際的な開発には英語やコミュニケーションの能力がもっと必要だと思いました。ヴァッテンフォール高校の生徒はみんな英語が上手で、日本語を覚えて積極的にコミュニケーションをとろうとする人もいました。しかし私は英語をうまく聞き取ることができず、言語や文化の違う相手にためらって話しかけることもあまりできませんでした。原子力発電に関するモノの流れは大規模で国際協力は不可欠です。言語以外の配慮もしながら伝えたいことを自分の言葉で正確に伝えられれば、お互い安心して自分の能力を十分に発揮しより良い開発ができるのではないかと思います。文化交流では食文化の紹介で盛り上がりました。日本のグミやせんべいを持っていきましたが、フランスはカマンベールチーズやマカロン、スウェーデンはセムラやチョコボールをくれました。食べ物おいしいという気持ちは、言語が違ってても伝わって、嬉しく思いました。

次に、研修を通して日本のエネルギーや教育について私が考えたことです。日本は火力の割合を減らすことが急務なので、今は火力の代わりに原子力を増やすべきです。しかし再生可能エネルギーの施設が増え発電の効率化がされたら、原子力も減らし、最終的に再生可能エネルギーをできるだけ10割に近づけていくのがいいと思います。再生可能エネルギーの中でも、資源量の伸びしろが大きい地熱発電に力を入れるといいと思います。また、エネルギーについて知識だけでなく経験をもって学べる機会を増やすべきだと考えます。英語やコミュニケーションについても、初対面の言語や文化の違う人と自力で話す機会を設けて、実践的な能力を育てられるようにすべきです。

研修前はこのままだと電気を使えなくなるんじゃないかと漫然と不安に思っていました。少ない資源で発電できる原子力というものがあり、再生可能エネルギーも増設や多様化が進んでいると知り、エネルギー問題を解決したいと現実的に考えられるようになりました。

文化面では、海外では挨拶が重要視されていることやフォーク・ナイフの使い方を学ぶことができました。また、歴史的な建造物の見学で、これまでただかっこいいなくらいに思っていた建築で恐ろしく困難な出来事も起こっていたとわかり、物事を知識のある状態で見ると世界がより面白くなると実感できました。今回の研修に参加させていただいたことに感謝し、学んだことを明るい将来につなげていきたいです。





研修会全体を振り返って、とても充実した良い経験ができたと思います。エネルギーに対して何もわからなかった自分が、この研修会を通して知識を得て、自分の意見を持てるようになりました。交流会を通して英語をもっと勉強しておくべきだったと感じ、自分の課題も明確になりました。さらに、エネルギー以外の面でも成長を実感できた場面が多くありました。ここからは、私がこの12日間の海外エネルギー事情研修会で訪れた施設や交流会を通して学んだことを紹介します。

まず、各国のエネルギー事情についてです。スウェーデンやフランスでは、なぜ原子力発電の導入が進められているのかという疑問を最初に持ちました。原子力発電の少ない日本との大きな違いは地震の有無です。地震の影響によって、ここまでエネルギー政策に違いが生まれるとは思いませんでした。青森県にある東通原子力発電所では、福島第一原発事故を教訓に、地震や津波への対策、電源の確保などさまざまな安全対策が取られています。基準を満たすだけでなく、防潮堤のかさ上げや耐震構造の見直しなど、安全性の向上に努めていることを知り、安心感を持ちました。フランスでは電力の約7割が原子力発電で賄われており、原子力エネルギーの生産量は世界第2位で、割合は世界第1位です。一方、スウェーデンでは約3割が原子力発電、約4割が水力発電であり、水資源が豊富であることが影響していると学びました。

#### 【フォルスマルク中・低レベル放射性廃棄物貯蔵施設】

中・低レベル放射性廃棄物貯蔵施設は拡張工事中のため見学できず、最終処分について話を聞きました。スウェーデンの最終処分場では使用済み核燃料を再利用せず、地下500メートルにあるトンネルに埋設して処分します。スウェーデンは強固な岩盤に支えられているため、このような処分方法が可能であると知りました。廃棄物はカプセル状の容器に入れて埋めるのですが、ふたをする際に加熱しながらふたをすることによってより密閉し、さらにベントナイトというもので覆います。ベントナイトは水に触れると何倍もの大きさに膨らむため、地下水などが漏れてきた時のための対策として使われます。全部埋めたらまたベントナイトでふさぎます。処分に使うトンネルの総延長は約60kmになる予定です。廃棄する前には30年～40年中間貯蔵・冷却し、十分に安定させてから最終処分をします。建設するときには環境にも配慮していて、地質、虫、植物を調査してからリストに挙げ、生物は引っ越しをさせるそうです。環境の配慮と廃棄物処分の両立はスウェーデンならではの方法であり興味深いと思いました。

#### 【ラ・アーク再処理施設】

UP2とUP3という施設で使用済み核燃料の再処理が行われています。日本の六ヶ所村にある再処理施設もこの施設をモデルにして作っていると聞いて驚きました。UP3は1990年から稼働していて、フランスは原子力がメインであるため施設の構造など信頼できると思いました。これからも原子力を使うとのことで次の

建設も考えているそうです。使用済み燃料はキャスクと呼ばれる容器に入れられ、鉄道で運ばれています。普通の電車の線路も使われていて使用済み燃料から出る熱は冷やすことはできないのですが、外に熱を放出できる仕組みになっているため問題は無いということを知りました。

#### 【現地高校生との交流】

現地の高校生との交流では、エネルギー問題に対する関心の高さに驚きました。交流会では、質問に対して一人が代表して答えるのではなく、複数の生徒がそれぞれ自分の意見を持ち、積極的に発言していました。フランスでは、エネルギー問題について考えすぎて不安になる人もいるため、負担をかけすぎないように配慮していると聞き、一人一人の意識の高さを感じました。また、小学校の頃からエネルギーについて学んでいる生徒もいると知り、日本でもエネルギー教育をより充実させる必要があると感じました。

交流の中には、原子力発電に依存しすぎていることに不安を感じているという意見もありました。原子力発電で事故が発生した場合、他の発電方法だけでは電力供給が十分にできない可能性があるためです。これは、日本において火力発電が使えなくなる状況に近いと考えました。このことから、特定の発電方法に偏るのではなく、状況に応じて柔軟に対応できるよう、エネルギー源のバランスを取ることが大切だと感じました。

ディスカッションでは想定される質問を自分なりに考え、答えられるように準備をしていましたが、実際に受けた質問は準備していないものでした。それでも、自分なりの考えを頭の中で整理して伝えることが出来ました。文化交流では日本のお菓子をたくさん興味を持ってもらえたことが嬉しかったです。最初はコミュニケーションをうまく取れず、聞かれたことに答えるだけのことが多かったのですが、次第に興味の話などができるようになり、とても充実した時間を過ごすことが出来ました。

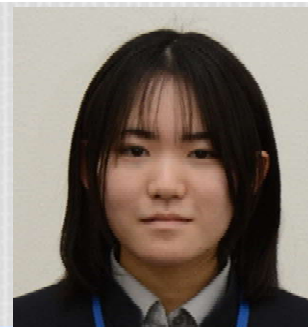
スウェーデンでの交流会では、Fikaというコーヒブレイクの習慣を経験しました。フォルスマルクでも同様に、クッキーやケーキを食べてコーヒを飲み、リラックスできました。フランスでの反省点を踏まえて自分から積極的に話しかけることで、楽しく会話することが出来ました。日本のお菓子を気に入ってもらえて、それぞれの好みを知ることができたのも良かったです。さらに、スウェーデンの夏は程よい気温でエアコンの使用がほとんどないため、余った電力を輸出していることも学びました。揚水式発電と電力輸出はスウェーデンの自然環境とエネルギー政策の特徴を生かした取り組みであり、非常に興味深いと感じました。

この研修会を通して、エネルギーについて自分の意見を少しずつ持てるようになり、原子力発電に対する考え方も変わりました。日本は福島第一原発事故を経験しましたが、その教訓を踏まえて安全基準を強化し、原子力発電所の再稼働を進めています。私はCO2排出量の削減と日本のエネルギー自給率を向上させるためには、

原子力発電を全く使わないという選択は現実的ではないと考えます。現在、火力発電のCO2排出量削減に向けた取り組みも進められていますが、原子力発電を適切に活用することで、さらに排出量を減らすことができると考えました。もちろん、災害に完全に対応できるかどうかは未知の部分もあります。しかし、安全対策を継続して強化しながらエネルギー自給率を高めていくためには、原子力発電は重要な役割を担うと考えます。日本はこれから火力発電を5割程度くらいまで下げ、その分を再生可能エネルギーと原子力発電で賄えばいいと思います。これが、今回の研修を通して私が考えた将来のエネルギーのあり方です。

最後に、このような貴重な経験の機会を与えてくださった商工会議所の皆様、ご指導いただいた先生方、そして支えてくれた家族に心から感謝申し上げます。この研修で得た経験と知識は、実際に体験したからこそ得られたものであり、私にとって大きな成長につながりました。この経験をここで終わらせることなく、自分の強みとして今後の学びや将来に生かしていきたいと思います。本当にありがとうございました。





今回の高校生による海外エネルギー事情研修会に参加させていただき私は、エネルギーに関わるさまざまな知識を身に付け、海外の文化や考え方に触れることができました。

## 【高校生との交流】

今回の研修ではフランスのグリニャール高校とスウェーデンのヴァッテンフォール高校に訪問させていただきました。どちらの高校生も自分と比べて、環境のことやエネルギーのことについて強く関心を持っていました。私はこの研修に参加するまでエネルギーのことについて少しの知識しか持っていませんでしたが、交流した高校生たちは幼い頃から学校での自然環境について考える活動や、原子力発電所の見学などを通して関心を持ってきたと話していて自分も見習わなければならないと感じました。特に私が印象的だったお話は、グリニャール高校がある地域では原子力関係の施設で不具合などが起きた際に家のポストにそれについての情報が投函されるというものです。一見信用が低くなってしまいそうな情報でもしっかりと正しい情報を伝えることでその地域に住む人々の原子力発電に対する理解が高いことに繋がっているのかもしれないと思いました。日本でも原子力発電を行うために怖がらせる情報だけでなく、現在行なっている対策や原子力発電の有用性を広く伝えていくことが大切だと思いました。

高校生との文化交流では日本のグミやけん玉、折り紙などを紹介しました。私は日本のグミが大好きなので海外の方が日本のグミを気に入ってくれるかとても楽しみにしていました。日本のグミは五種類のグミを食べてもらいお気に入りのグミを選んでもらうという形をとりました。フランスの高校ではやわらかくて甘いピュレグミが圧倒的に人気でした。スウェーデンでもやわらかいピュレグミが人気だと思っていたのですが、私の予想に反してスウェーデンでは硬いタフグミがとても人気でした。スウェーデンのグミを食べてみた時にとっても硬かったのでスウェーデンの方は硬いグミが好きなのかもしれません。また、けん玉や折り紙などを見せながら伝えて一緒にできた時が一番嬉しかったです。英語で説明するのが難しくても身振り手振りや表情を豊かにして伝えることを大切にしました。交流後に楽しかったと言ってもらえたことも嬉しかったです。

## 【ラ・アーク再処理工場】

フランスで訪問したラ・アーク再処理工場では実際に稼働している工場の見学をできて貴重な経験になりました。ラ・アーク再処理工場では使用済み核燃料の約96%が再処理され、メロックス工場でMOX燃料を作っています。工場内では常に放射線量わかる機械を使用していました。数値は見学中0のまま直に施設内の安全性を見ることができました。また、工場内の燃料を扱う際は人が内部に入らずにロボットアームなどの機械を使用していました。ロボットアームを練習する場所もあり、しっかりと訓練した上で実際に使用するそうです。機械はガラス越しに目で見ることが出来ます。

一見あまり厚さがなくガラスに見えても1メートル近くの厚みがあるようで衝撃でした。施設内を見学することでどのように工場の安全性を守っているかを知ることができました。

#### 【フォルシュマルク中・低レベル放射性廃棄物貯蔵施設】

中・低レベル放射性廃棄物貯蔵施設は拡張工事中のため見学できず、使用済み核燃料の最終処分について話を聞きました。スウェーデンのフォルシュマルクではフランスと異なり使用済み核燃料のリサイクルを行わずにカプセルの中に保存して地下深くに処分するそうです。国によって使用済み核燃料の処理方法に違いがあることがとても興味深かったです。スウェーデンは地盤がとても強く日本と違い、地震が全くないという特徴もあります。銅のカプセルとスウェーデンの強い岩盤とベントナイトという機密性がとても高い素材の3つの構造で安全性が確保されます。現在最終処分地の建設が進められていて、そのために地層や生態系の調査を行なっているそうです。その地域の特性をしっかりと調べて把握することの大切さを感じました。私が一番印象的だったことは地下の最終処分場が完成したら関連施設を全て取り払い自然に戻すという点です。スウェーデンの自然を大切に、自然を借りたら自然に戻すという考え方が表れていて自分も取り入れたい考え方でした。

#### 【環境モデル都市】

スウェーデンの環境モデル都市を訪問して印象的だったのはほとんど自動車を使用せず、徒歩や自転車を利用しているところです。青森県では移動手段といえば自動車なので自動車を利用せずに生活していることにとても驚きました。自転車が冬でも通れるように自転車道が雪かきされていたのでそういった設備が整っているからこそ自動車だけに頼らないような生活が可能なのかなと思いました。また、リサイクル設備も整えられていました。家の近くにリサイクルのためにゴミを分別して入れるゴミ箱があり、そこに入れたゴミがリサイクル施設に送られる仕組みがありました。

建物の屋上に植物や太陽光パネルを設置したり、道に植物を植えて水捌けをよくしたりなど景観と利便性がどちらも考えられていると感じました。近くに森があり、自然豊かでとても素敵な空間だったので私も住んでみたいと思いました。

#### 【文化】

私はその国ならではの食べ物や建物を楽しみにしていました。フランスは出されるパンが全部美味しく、チーズやオレンジなどもすごく美味しかったです。レストランでは日本ではあまり見かけない食材や組み合わせの料理を食べる機会がありました。中にはあまり好みではないものもありましたが、その分、強く印象に残る経験になりました。スウェーデンの食べ物はフランスよりも日本に近いような味付けで美味しかったです。かなりしょっぱいものが多かったです。スウェーデンのしょっぱいグミを食べた時は衝撃でした。注文、買い物をする時などは堂々と話す

ように心がけていましたが、自分の言葉が伝わるかどうか内心ビクビクしてました。フランスのモン・サン・ミシェルやルーブル美術館では、フランスのキリスト教に関わる歴史や、時代によって変化してきた建物や絵画を感じることができました。フランスもスウェーデンも都心部がビルが立ち並ぶ様子ではなく昔ながらの景観が守られていて感動しました。

#### 【最後に】

今回の研修を通して、これまで深く考えることのなかったエネルギー問題に強い関心を持つようになり、日本の将来のエネルギーのあり方について考えるようになりました。エネルギー問題は単純なものではなく国の地理的特徴や考え方の違いが影響していることを知りました。また、プレゼンテーションや文化交流を通して、どのようにすれば自分の考えや思いを相手に分かりやすく伝えられるのかについても学ぶことができました。

この研修と一緒に参加したみんなと初めは緊張してなかなか話せませんでしたがいろいろな話を共有して絆を深めることができました。さらに、このような貴重な研修に参加させていただき、支えてくださった青森商工会議所や東北エネルギー懇談会の皆様に、心から感謝しています。ここで学んだ知識や経験を活かしてこれからの成長に繋げていきたいです。





私がこの研修に参加したきっかけは、「下北BOUSAIネットワーク」という下北管内の高校生を対象に行われている活動の中で観た「Fukushima50」である。私の住む下北では、原子力という分野に触れる機会はほかの県や地域に住んでいる人よりも多いように感じるが、実際に原子力発電のあり方について詳しく探求することはなかった。しかし、この映画を見て、実際に2011年3月福島では何が起こっていたのかについて知り、ショックを感じたと同時に、安全な原子力発電を行うためにはどうすればよいのかと疑問に思い、原子力という分野に興味を持った。友人に原子力にどのようなイメージを持っているか尋ねたところ、「少し怖く感じるからほかの発電方法がいい。」という意見をもらった。

この返答をきっかけに、私の中でのテーマを「日本人と原子力発電が積極的に行われている国の人との意見の違いを見つける」というものに定めた。

実際に研修が始まり、事前研修として東通原子力発電所、日本原燃再処理工場を訪問した。そこで現在行われている安全対策や設備、再処理の方法など様々なことについて学んだ。そして出国前に各国大使館を訪問し、それぞれの国の地理的特徴や歴史的な人物、エネルギー供給状況などについて学びを深めた。

そして実際にフランスのラ・アーク再処理工場を見学した。はじめ、施設の全体を見たときに、想像より小規模な施設である印象を受けたが、施設の大半が地下に埋まっているという説明を聞き、納得した。また、日本を含めた世界各国の使用済み核燃料を工場まで運搬する際は船を使って運ばれるが、ヨーロッパの中のものは鉄道で運搬されるという話を聞き、とても驚いたと同時に、安全性に対する不安も感じた。スウェーデンでは使用済み燃料については、再処理は一切行われていなかった。再処理に対しては、日本やフランスとは異なり、マイナスな考えを持っている人が多くいた。また、使用済み燃料を埋めた後にかぶせる石のようなものを見て、その粒は水を含むと密になり、水の侵入を防止することができるという説明を聞き、石自体は思っていたよりも軽く、とても驚いた。スウェーデンでは地震は起こらない。火山もない。しかし、実際に地震が起きたときにはどのような被害が出るかわからない、という話もあったため、世界各国で耐震構造や、地震が起こってしまった時の緊急時マニュアルを用意しておくべきだと感じた。

フランスは、原子力発電に頼ったエネルギー供給であるのに対し、スウェーデンでは水資源が豊富という特徴を生かし、水力発電が盛んに行われており、それ以外を原子力発電やほかの再生可能エネルギーで賄うという形のエネルギー供給がされており、とても理想的なエネルギーミックスの形であると感じた。

フランスの高校生との交流では、日本語を学ぶ学生と交流した。エネルギーについてのディスカッションでは、日本のエネルギー教育の疎さを感じた。私はずっとフランスの原子力発電に対する支持率の高さについてとても疑問に思っていた。しかし、幼いころから原子力施設の見学をしたり、広報誌を家に配っていたり、日常生活で原子力に触れる機会が多いことが、支持率の高さにつながっていると感じた。しかし、現状では原子力に頼りすぎているため、依存度を減らしていくべきだという意見も見られた。

そんな中スウェーデンでは、原子力が最も良いと考えている人が多かった。スウェーデンでは、2045年までに化石燃料の使用を廃止する目標が立てられており、目標達成に向けた取り組みが積極的に進められていた。

そして文化交流の時間では、日本のおかしやけん玉、習字などの玩具を現地の高校生と楽しみ、とても有意義な時間を過ごした。

フランスを訪問した際は、自分の英語が本当に相手に伝わるかどうか不安でありコミュニケーションがとれなかったが、スウェーデンではこの反省を踏まえ、怖がらずに積極的に話しかけるようにした。その結果、趣味や家族のことなど様々なことについて知ることができた。この経験から、何事にも怖がらずにチャレンジしていくことが大切であることを改めて感じた。

スウェーデンで訪問した環境保全地区では、「建築は建物を建てるだけが建築じゃない」という話を聞き、とても興味を持った。この地区では高い建物を積極的に作り、影を増やすことで夏期のエアコン使用を抑えている。また、屋根には植物が設置されており、直射日光を防ぐことで家の中が涼しくなるといった工夫が施されていた。植えられている植物などもすべて行政が管理しており、新しく植物を植える際も会議を通じてからだという。さらにスウェーデンは車の所持率が非常に低く、それに代わって、カーシェア用の車が街のいたるところに置かれていた。そして自転車を利用する人がとても多く、雪の中でも乗ることができるよう、自転車用の冬タイヤまであるという。車の利用が少ないということはCO2の排出量が少ないということであり、それに加え、カーシェアなどで使用されている車のほとんどが電気自動車であるため、様々な点から自然の保護を行っている。

このような政策をモニタリングし、フィードバックする活動を繰り返し、地域住民や建築家の意見を聞くことでより良い都市づくりに努めていた。

そしてこの街ではThe 5minutes city という政策がとられていた。この政策はお店や幼稚園、バス、地下鉄などの生活に欠かせないほとんどすべての公共施設が家から5分以内の場所に設けられている状態にする政策のことである。この政策によって地域住民はとても生活がしやすくQOLの上昇にもつながっているのではないかと考えた。

このような研修のほかにも、ルーヴル美術館やモン・サン・ミッシェル、ヴェルサイユ宮殿など、世界的に有名な観光地へ行き、昔の人々の生活様式や、宗教についてなど歴史をはじめとした様々なことについて学んだ。

現在、フランスでは設備の老朽化や発電方法の分散化を目的として、原子力発電への依存度を下げる政策が進められており、現在約7割を占める原子力発電の割合を、最終的には5割程度まで抑えるという政策が掲げられている。

私は研修に参加する前、日本でもさらに原子力発電をさらに推進していくべきだと考えていた。しかし、地震の少ないフランスでさえ原子力発電が慎重に扱われている現状を知り、地震大国である日本が今後さらに原子力発電を推進していくためには、常にリスクと隣り合わせであることを十分に認識しなければならないと再確認した。同時に、国民の理解と賛成を得ることの難しさも強く感じた。

今後は、原子力発電とどのように向き合っていくのかを、より慎重に考えていく

---

ことが重要な課題であると思う。そして、核融合や二酸化炭素を利用した技術、大量の水を必要としない原子炉など、新たな発電方法の研究開発に力を入れ、日本が世界有数のエネルギー大国となれるような政策を推進していくことが望ましいと考える。

最後に、この研修に携わってくださった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。





青森県立弘前中央高等学校

はなだ なゆか  
花田 なゆか

まずはこのような貴重な機会を用意してくださり、支えてくださった皆様に深く感謝しています。この研修会に参加して、普段の生活では経験できない特別な体験をたくさんさせていただきました。研修に参加するにあたり、私は「現地で自分の目でエネルギー政策の実態を確かめること」と「現地高校生と積極的に交流すること」を目標に掲げていました。実際に各施設を訪れ、担当者の方のお話を直接聞くことができたこと、さらに高校生との意見交流を通して自分の考えを伝えることができたことから、目標は概ね達成できたと感じています。

研修の募集を知ったとき、普段の私は、このような活動に積極的に参加するようなタイプではなかったので、正直少し迷いました。しかし、ここで挑戦しなければ何も変わらないし、参加することで新しい学びや出会いがあるかもしれないと思い、思い切って応募することを決めました。

今回訪問したフランスとスウェーデンは原子力発電と非常に関わりの深い国です。フランスは発電量の約7割を原子力発電が占める一方、スウェーデンは水力発電が約4割、原子力発電が約3割を占めており、再生可能エネルギーと原子力発電を組み合わせた電源構成になっています。そんな二か国を訪問し、それぞれの国がどのような考えのもとでエネルギー政策を行っているのかを自分の目で確かめてみたいと思いました。

フランスの「ラ・アーク再処理工場」では、使用済み核燃料の約96%を再利用し、残りのわずか4%をガラス固化体として処理しており、この技術は資源の少ない国にとって大きな希望である一方、廃棄物の最終処分場の確保が現地でも課題となっていることを学び、エネルギーの恩恵を受けている私たちには責任もあるのだと痛感しました。事前に見学した日本原燃のサイクル施設でも再処理について学びましたが、フランスではすでに大規模に再処理が実施され、安定して運用されている点に大きな違いを感じました。一方で、日本では最終処分場の選定が進んでいないという課題があり、エネルギー政策の難しさも改めて実感しました。

スウェーデンでは、日本とは異なり、使用済み燃料を再処理せず、廃棄物を地下の岩盤内に貯蔵するということを知りました。最終処分をする地下の施設は現在建設工事が行われており、工事の過程では元々その場所に住んでいた生物への配慮をしているということを知り、開発を進めながらも環境への配慮を忘れないことも必要だと気づかされました。

スウェーデンの「ロイヤルシーポート」では、都市開発と環境配慮を両立させる取り組みについて学びました。日本では、都市化が進む中で、エネルギー消費や環境負荷の増大が課題となっています。ロイヤルシーポートのように、長期的な視点

で計画的に街づくりを進めることが重要だと感じました。エネルギー問題は発電所だけでなく、都市の構造や人々の暮らしとも深く関わっていることを実感しました。

現地高校生との交流では、日本とは異なりエネルギー問題を自分事として考えている生徒が非常に多いことに驚きました。フランスの「グリニャール高校」には親が原子力発電関連の仕事に就いている生徒が8割ほどいました。さらに、幼いころからエネルギーや環境問題に関して学ぶ機会も多いため、これらの話題に関心が高い人が多いのだろうなと思いました。日本でもエネルギー問題をより身近なテーマとして学ぶ機会を増やし、自分たちの将来に関わる課題として主体的に考える教育が必要だと感じました。一方で、現地高校生の中には、幼い頃からエネルギーや環境問題について繰り返し話題にされてきたことで「エネルギーアレルギー」のようになってしまったと話す人もいました。その言葉を聞き、単に情報を増やすのではなく、正しい情報をわかりやすく、適切な量で伝えることが大切などだと考えさせられました。

以前私は、事前研修会でフランスやスウェーデンでは原子力発電の割合が多いということを学んだこともあり、原子力発電が現地の人々にとって身近な存在であるため、これから先も高い割合で原子力発電を使っていくべきだと考えている人が多いと思っていました。しかし、実際には原子力発電の割合を少しずつ減らし、再生可能エネルギーの割合を増やしていくべきだと考えている高校生が多いことがわかりました。

この研修会に参加する前、私は、原子力発電は事故が起こると影響が大きく、危険だというイメージから原子力発電に対して否定的なイメージを持っていました。しかし、エネルギーに関して学んでいく中で、原子力発電は安定的な供給や脱炭素、燃料コストの安定など様々な点から必要不可欠な発電方法だと知り、原子力発電も重要な選択肢の一つとして活用していくべきだと考えるようになりました。

日本は今後、火力発電の割合を減らしながら、原子力発電と再生可能エネルギーをバランスよく組み合わせていくべきだと私は考えます。再生可能エネルギーは環境への負担が少ない一方で、天候に左右されやすいという課題があります。その不安定さを補うためには、安定した電力供給が可能な原子力発電の役割も重要になると思いました。しかし、原子力発電を活用していくためには、安全対策を徹底し、廃棄物処理の問題から目をそらさず、国民に丁寧に説明し続けることが必要だと感じました。立場や価値観が異なる人々と対話を重ねながら、より良い解決策を探っていく姿勢こそが、これからのエネルギー問題には不可欠だと学びました。

文化交流では日本のお菓子や、伝統的な文化を体験してもらい、楽しんでもらったのがうれしかったです。特に、日本のアニメや漫画は多くの現地高校生が知って

いて、驚きました。普段の生活では英語を話す機会がないので、コミュニケーションをとることに不安を感じていましたが、完璧な英語を話せなくても、自分の思いを伝えようとする気持ちがあれば、相手に理解してもらえることを実感しました。これから、グローバル化が進む社会では英語は必ず必要になると、交流を通して強く感じました。

数々の有名観光地を訪れましたが、その中でも特に心に残ったのは「モン・サン・ミッシェル」でした。生きているうちに一度は行ってみたいと思っていた場所だったので、実際に自分の目でその景色を見たときは、とても感動しました。海に囲まれた幻想的な景色や、長い歴史を感じさせる建物の美しさは、写真で見るとは全く違う迫力がありました。

私は以前から海外とかかわりのある仕事に興味がありましたが、研修会に参加しより強く国際的な仕事に就きたいと思うようになりました。現地を訪れて、異国の良さを発見できた一方で、自国の良さに気付くきっかけにもなりました。

この研修会に携わっていただいた青森商工会議所の方々、東北エネルギー懇談会の方々、現地ガイドさん、資料の作成などを手伝ってくださった先生方、一緒に研修会を乗り越えた5人の仲間、背中を押してくれた家族、たくさんの方々の支えがあってこの研修会を無事に終えることができました。本当にありがとうございました。この研修で得た学びや気づきを一時的な経験で終わらせるのではなく、自分の進路や将来の選択にしっかりと生かしていきたいと思えます。





私は令和8年1月26日から1泊12日の日程で第28回高校生による海外エネルギー事情研修会に参加してきました。施設見学や講義でエネルギーに関する知識を学び、仲間や現地の高校生との交流から異なる文化や価値観を理解し、自分自身の成長につなげることができたと思います。

10月にむつ市で行われた第1回事前研修では、参加者の顔合わせとエネルギー・原子力に関する講義に加えて東通原子力発電所と日本原燃の再処理工場の見学をしました。自分はエネルギー・原子力に関する基礎知識が十分でないと感じたので、講義や施設見学ではなるべくメモをとり、分からないところがあれば積極的に質問をするように心がけました。事前研修が終わってからも、エネルギーに関する発表やディスカッションに向けた準備と並行して、原子力の知識をつけるために資料を読んだり調べたりしました。

1月に行われた第2回事前研修では、現地の高校生との交流会で行う英語での自己紹介とエネルギー・日本と青森の文化に関する発表の練習とディスカッション、文化交流に向けた準備をしました。最初に発表したときは緊張してあまり声が出なかったり、スムーズな発表ができませんでしたが、回数を重ねるごとに段々と慣れて自信がついてきて、スムーズで聞きやすい発表ができるようになりました。エネルギーに関するディスカッションや文化交流の準備をしているうちに、自分が青森県の代表として海外に行くんだという実感が湧いてきました。

本番の海外研修では、フランス・スウェーデン合わせて2か所の原子力施設を見学し、両国と日本の原子力に対する意識や課題、それに対する取り組み方の違いを知ることができました。フランスでは、オラノ社のラ・アーク再処理施設を見学しました。この施設は1966年に操業を開始した、原子力発電で使用した燃料の再処理を行う工場で、使用済み燃料集合体を国内外から受け入れています。ここには3つの再処理をするためのプラントがあり、現在は最初に造られた1つを除いた2つのプラントが稼働していて、2005年には1,100トンを超えて再処理した実績があります。ここで私たちはフランスのエネルギー事情とウランを採掘してから核燃料になるまでの過程、どのように再処理をしているかを教えてもらったあとに、実際に工場の中の燃料集合体を解体するための部屋や遠隔操作のためのロボットアームを見学しました。高い線量の放射線に人間が曝されることを防ぐために様々な工夫がされていることを実感しました。青森県六ヶ所村にある再処理工場もラ・アーク再処理工場を参考にして作られていることもあり、日本原燃の社員の方が研修に来ていたので、昼食の時間にいろいろなお話を聞かせていただき、とても貴重な体験ができたと思います。

スウェーデンでは、SKB社のフォルスマルク中・低レベル放射性廃棄物貯蔵所とフォルスマルク原子力発電所PR館を見学しました。フォルスマルク中・低レベル放射性廃棄物貯蔵所は、スウェーデンの原子力発電所や病院や工場などから出る中・低レベル放射性廃棄物の埋め立て事業をしています。現在、使用済み核燃料の最終処分場を建設工事中ですが、この施設は安定した岩盤の上に立地していて、地下500mまでトンネルを掘って、銅製のカプセルに詰めた使用済み核燃料を地下

に置き、ベントナイトという地下水を吸収する粘土のようなもので密閉するという方法を採用します。そして容量が一杯になったら最終的には陸上の設備を取り払い、地下につながるトンネルを閉じて元通りにすることで、完全な密封状態が保たれます。フランスや日本では、使用済み核燃料は約96%が再利用可能なので再利用をするべきという考えのもとに再処理事業に取り組んでいるのに対し、スウェーデンは使用済み核燃料を再利用すると発電効率が落ちるので、再利用はせずにすべて埋めてしまうという点で、私は国による考えの違いを感じました。スウェーデン・フランス両国の施設は、ともに地震のリスクがない場所に立地しているため、日本の原子力施設とは違って地震対策はされておらず、テロ等の対策に力を入れているように思いました。船や鉄道で核燃料を運ぶ時も、しっかり護衛がついていることを知り、安全性の高さを実感しました。

スウェーデンでは、環境モデル地区のロイヤルシーポートの見学をしました。ロイヤルシーポートはストックホルム市内にあり、かつてガスや原油のタンク基地があった場所の再開発をして都市全体の低エネルギー化や再生可能エネルギーの導入を推進しています。住宅街やマンションの屋上の緑化やソーラーパネルの設置、建物の保温性能の基準を定める等の街で使用するエネルギーの量を少なくする取り組みがなされています。また、街の地下にパイプを通し、地上に出ているところから分別したごみを入れて、1か所から吸引することでごみを効率よく集めることができる装置があり、とても画期的だと思いました。ここの住民たちも環境への意識が高く、再開発をする際に住民からの意見を取り入れることもあるそうです。移動は主に公共交通機関や自転車であり、カーシェアを利用する人はかなり少ないことを知り、環境にやさしい都市を造るには街の再開発だけでなく、住民の意識や心がけも重要であることを学びました。

現地の高校での交流会では、同年代の生徒たちとの意見交換を通して多くの学びを得ることができました。フランスのグリニャール高校では、日本語を学んでいる生徒たちと交流しました。近くに原子力発電所や再処理工場があり、多くの生徒の親が原子力関連の職業についているので、校外学習で原子力施設に行ったり、授業でエネルギーや原子力に関する内容を教えているということを知りました。生徒の原子力に対する関心も高く、エネルギーに関するディスカッションはとても盛り上がりました。また、文化交流では日本のお菓子の食べ比べや書道を教えて、喜んでもらうことができました。

スウェーデンのヴァッテンフォール高校は、ヴァッテンフォールという電力会社が運営している高校で、生徒は電力会社に就職する人が多いので、エネルギーや原子力についての専門的な知識を学んでいます。エネルギーのディスカッションでは原子力や再生可能エネルギーに対する考え方や取り組みの違いを共有し、学ぶことができました。施設案内では学校の近くの貴族が住んでいた家や学生寮を見学し、スウェーデンの文化を知ることができました。また、抹茶が好きという人がいて、日本の文化が海外でも有名であることがわかりました。

---

今回の研修会では、買い物や現地の人や高校生との会話で英語を多用しました。自分の英語が海外で通じるかとても不安でしたが、伝えようという思いさえあれば、しっかり意思疎通をとることができ、友達もできたので、自分の英語力に少し自信がつけました。しかし、語彙力が不足していると痛感したので、もっと英語を勉強して、海外に行ったときに困らないようにしたいと思いました。海外は日本と違うことばかりで、自分の今までの常識や価値観が全く通用しないことが多く、何もかもが新鮮で面白く、とても貴重で有意義な体験をさせてもらいました。この研修会に参加したことで、原子力に携わる仕事をしたいという思いがより一層強くなりました。

最後に、この研修会に参加するにあたり支えてくださった家族、先生方、青森県商工会議所連合会様、東北エネルギー懇談会様に心から感謝いたします。



## 青森県立青森工業高等学校 教諭 小山内 好子

10月の事前研修会で初めて会った時、6名の参加者は緊張と不安とで表情が強ばっていました。ぎこちなく、何を話したらいいのかわからないような様子でしたが、研修会で同じ物を食べ、時間を共にするうちに、自然と笑顔が出るようになりました。そして課題に取り組み、意見を擦り合わせていく中で、互いが今回のミッションをクリアするための同士であることを自覚し、少しずつ距離を縮めていったのです。

訪問先であるフランスのグリニャール高校とスウェーデンのヴァッテンファール高校で、自国の文化やエネルギー事情について意見交換をしましたが、同年代の若者の等身大の想いを直接聞くことができたのは、貴重な経験となったはずです。思いがけない質問にも臆せず自分の意見を述べたり、現地の高校生に質問したりする姿に、当初とは比べものにならないほどの成長を感じました。また、オラノ社ラ・アーク再処理工場で研修中の日本原燃の技師の方々と懇談をしましたが、仕事内容や、やりがいなどを伺うことができたことで原子力エネルギー産業に対してより理解が深まったのではないかと思います。SKB社フォルシュマルク中・低レベル放射性廃棄物貯蔵施設とフォルシュマルク原子力発電所PR館では、日本の企業の方とお話をする機会を得て、世界で活躍する日本人の存在に大きく勇気づけられました。

現在、環境問題やロシアによるウクライナ侵攻など、世界は多くの課題を抱えています。そして、そのような状況だからこそ、海外の高校生との草の根レベルでの交流を通して、意見や価値観を共有・尊重し合い、協力してさまざまな問題を解決しようとする姿勢を育むのは、とても重要なことです。今回参加した6名は、この海外エネルギー事情研修会を終えた後も、現地で見たり感じたこと、学んだことを生かし、これからの日本や青森を担う人材として活躍してくれるでしょう。最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えてくださった青森県商工会議所連合会様をはじめ、この研修会に関わった全ての皆さまに心より感謝申し上げます。

---

令和8年（2026年）3月 発行

青森県商工会議所連合会